

日本人の通過儀礼と
古来からの社会行事を
取り上げていきます

日本の儀礼

〃 正月 〃



五穀豊穰や幸運をもたらす
年神様をおもてなし

お正月に海外旅行へ出かける人も多いですが、本来、お正月はゴールデンウィークのようなただの長期休暇ではありません。かつては家族揃って新年の挨拶を交わし、ゆつくりと過ごすのが習わしでした。

そもそもお正月とは、新しい年の豊作や幸運をもたらしてくれる年神様（正月様）を家にお迎えする行事。平安時代には、先祖の御霊が訪れると考えられていました。

年神様は松の内（元旦から7日まで）は家にとどまり、家族に一年を

無事に生き抜く力を与えてくれるのです。また、年神様は人々に年齢を授けるという大事な役割もあり、そのため昔は誰もが正月に一つ歳を重ねました（数え年）。

門松も正月飾りも鏡餅も
年神様を迎えるためのもの

年神様を家に迎えるため、暮れからさまざまな準備をしました。まずは年神様が訪れるための目印となるのが、家の門や玄関口に立てた門松。そして、玄関口や神棚に飾るしめ飾りは不浄なものを取り除き、「神様が訪れる場所を作りました」という



暮れにつくっておく 「おせち料理」

もともとは季節の変わり目である正月と五節句に食べられていた料理でしたが、最も重要な節句の正月料理だけを「おせち」と呼ぶようになりました。かつては正月の間は煮炊きを慎むというしきたりがあったため、日持ちのする縁起をかついだ料理（黒豆、数の子、たたきごぼうなど）が重箱に詰められ、年神様にお供えしたのち、お屠蘇やお雑煮とともに家族でいただきました。



意味がありました。

床の間や神棚などに飾る鏡餅も同様です。年神様の御霊が宿するための聖なるお供え物でした。

年末に餅つきをして用意する鏡餅は、昔の丸い鏡を表しているとか、心臓の形を表しているなどと言われています。地方によって飾り方は異なりますが、半紙を敷いた三方（さんぽう）と呼ばれる台に載せ、紙垂（しで）、ユズリハ、ウラジロ、ダイダイ、昆布などで飾り付けるのが一般的。鏡餅は正月11日の鏡開きまで飾られました。

三が日に行う正月行事 新年初めて水を汲む「若水」

水道が普及するまでは、各家庭で

井戸などから水を汲んで生活用水としていました。正月に一家の主人が初めて水を汲む「若水」は一年の邪気を払うとされ、非常に大切なものでした。年神様に供えたり、口をすすいだり飲んだりしたほか、雑煮などの正月料理に使われました。

新しい年に初めて筆をとり、若水ですった墨で一年の抱負などをしたためる「書き初め」は、1月2日に行われました。もともとは宮中の儀式でしたが、江戸時代以降寺子屋や学校でこの習慣が広まったと言われています。

今でも各地の書道教室や学校の書道部などで、正月行事として書き初め大会が行われています。